Ⅲ　市民の生涯学習推進のための基本的な考え方
～理念～

これまでに述べてきたように，21世紀の社会と京都を展望するとき，生涯学習・生涯教育の推進が大きな課題となりますが，京都の生涯学習・生涯教育に関わる様々な特性は，その推進にとって有利な条件であると言うことができます。したがって，市民の生涯学習の推進を目指すとき，まず，こうした特性を踏まえたうえで，生涯学習を推進するに当たっての基本的な考え方～理念～を明らかにし，その方向性を示すことが必要です。

市民一人一人の「生きがい」追求と市民相互の「寄り合い」交流を通じた豊かな＜ハートウェア＞を！

人は，個人として，全生涯にわたって主体的に学び続け，自己を高めていくとともに，社会的な存在として，豊かな人間性や市民意識，人権意識，国際感覚をもって心豊かな生活を続けていくことが求められています。

その場合，市民一人一人が自己の生きがいを追求するために自らの意志に基づいて学習課題を見つけ出し，自発的に学習することを基本としながら，それだけで終わることなく，

いろいろな人々との交流や地域での交流など市民相互の寄り合い交流を通じて，社会との関わりを持ちながら，学習を展開していくことが必要です。

そうした学習の目的は，先に述べたように生きる手段としての知識や情報，あるいは，それらを使いこなして問題解決を図る能力を身につけるということにとどまらず，それらを生かして，何のために，どのように生きるかという人間としての生き方＜ハートウェア＞を豊かにすることにあるはずです。

したがって，市民の生涯学習を推進するに当たっては，『市民一人一人の「生きがい」の追求と市民相互の「寄り合い」交流を通じた豊かな＜ハートウェア＞を』目指すことが必要であると考えます。

この『市民一人一人の「生きがい」追求と市民相互の「寄り合い」交流を通じた豊かな＜ハートウェア＞』は，次の2つの道すじを結び付けることによって実現できます。

(1) 学習のネットワーキングによる市民一人一人の「生きがい」追求

市民アンケート調査の結果によると，回答者のうち，何らかの学習希望を持つ人の率は86.3％（K），また，過去2～3年間

に何らかの学習の経験を持つ人の率も61.6%（L）という高率になっています。このように市民の学習意欲はかなりの高まりを示しており，市民が様々な学習活動に参加している実態がうかがえます。

こうした人々の学習への意欲を大切にしながら，市民一人一人が「生きがい」を追求して行う様々な学習活動を促進し，支援するためには，人の生涯を通しての教育機会を一人一人に適した形で体系化するいわゆる垂直的統合とともに，社会のあらゆる教育関係機関の教育機能をどの人の必要にも応じられるように連携を深めて体系化するいわゆる水平的統合を実現することが必要です。

具体的には，市民一人一人のだれもが，生涯のあらゆる時期を通して，いつでも，どこでも，望む時に容易に学習できるようにすることが必要です。

また，市民が単に学習情報の受け手にとどまるだけではなく，時には，情報の送り手になるなど積極的にいろいろな市民へ働きかけていくことによって，一層学習内容を深めることができるようにすることも必要です。

こうしたことができるようにするための学習システムとして，学習のネットワーキング（16）の実現を提言します。

この学習のネットワーキングは，市民がそれぞれの生活の中で学習することによって自らの課題に気づき，その課題への対応の方法を見い出した経験を網の目のように連携させていくことによって，新しい学習方法や新しい課題を見い出していこうとするものです。

したがって，単なる施設の場所的なネットワーク化だけを意味するのではなく，情報のネットワーク化，学習機会のネットワーク化等も含めて，市民の学習の方法を時間的にも，機能的にも広げようとする新しい内容を含んだネットワーク化を意味するものです。

学習のネットワーキングを利用する中で学習活動を一層発展させ，学習を深めていくことによって，一人一人にとっても「生きがい」の追求は，より深まり，確かなものになっていきます。

(2)　多くの市民の「寄り合い」による相互交流

既に述べたとおり，京都の文化の特性の一つに寄り合い性があります。長い歴史の中で，町衆は町会所に寄り合い，情報を交換し，教育を高めながら自分たちの文化を作り出し，高い自治意識を育ててきました。町衆以来の市民の間にそうして培われてきた「寄り合い」の精神が京都の文化創造の基

盤の一つとなっています。

今日，都市化した社会の中で，新しい形での市民相互の関わりや地域との関わりが求められています。また，学習活動が多様化し，その個人化が進む中で，学習者同士の新たな交流への欲求も高まってきています。

人間が社会的な存在である限り孤立して生きていくことはできませんし，いろいろな人々との交流によって生活をより豊かにしていくことができます。生涯学習においても，交流を通じた学習によって，それぞれの学習者の学習内容をより豊かなものにすることができます。

したがって，今後の市民の学習活動を推進するためには，一人一人が，いろいろな人々や地域社会との関わりの中で，自らの学習活動を一層充実し，深めることができ，また，新たな学習への契機をつかむことができるような場や機会を設けることが非常に大切になってきます。

こうした場として，世代を超え，地域を超え，民族を超えて，市民が集い，コミュニケーションできる「寄り合い」の場を創出することを提言します。

「寄り合い」の場は，市民の生活に密着して様々な学習活動や地域活動の拠点としての機能を果たすものであり，そう

した様々な活動の参加者の相互交流や地域間の交流あるいは市民レベルでの国際的な交流などを生み出します。

このことは，市民の間に受け継がれてきている町衆以来の「寄り合い」精神を，新しい時代の中で新しい文化の創造に結び付けていくことであり，同時に京都文化の特性である重層性や国際性を生かしていくことにもなります。こうした多種多様な「寄り合い」の場，特に，地域社会における全体的な「寄り合い」の場の形成とそこでの交流は，学習する個人の社会的な孤立や特定の集団やグループによる学習の固定化といった傾向を克服していくことにもつながります。

以上のように，市民の生涯学習を推進するためには，「学習のネットワーキングによる市民一人一人の生きがい追求」と「多くの市民の寄り合いによる相互交流」という二つの道すじが考えられますが，この二つの道すじをそれぞを単独に機能させるのでは，効果は限られてしまいます。

この二つを結合して，総合的な取組として機能させることによって市民の豊かな＜ハートウェア＞を目指すことが，21世紀に向けた京都の生涯学習とそれに対応する生涯教育の基本的な課題です。さらに，こうした点についての市民の理解を深めていくことも非常に大切です。